

Title	アントニオ・ブエロ・バリエホの劇作と抵抗
Author(s)	岡本, 淳子
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/58801">https://hdl.handle.net/11094/58801</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	岡本 淳子
本籍（国籍）	
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲 第 81 号
学位授与年月日	平成19年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	アントニオ・ブエロ・バリエホの劇作と抵抗
論文審査委員	主 査 教 授 岩 間 正 邦 副 査 教 授 染 田 秀 藤 副 査 教 授 貴 志 雅 之 副 査 教 授 市 川 明 副 査 教 授 堀 内 研 二

## 論文の内容要旨

### 序章 抵抗者ブエロ・バリエホ

序章では、17世紀から20世紀初頭までのスペイン演劇の流れを概観しながら、復活の兆しを見せる演劇界がスペイン内戦およびフランコの独裁制によって再び危機を迎える時期に、新人作家ブエロが出現したことの重要性を確認する。ブエロの生い立ち、当時のスペインの社会状況、そして彼の政治活動を踏まえたうえで作家と検閲との関係を俯瞰すると、彼の劇作法〈斜めの視線〉が浮上する。ブエロ作品は、独裁制国家を象徴する権力、暴力、抵抗を作品内で描いているにもかかわらず、なぜ上演を許可されたのか。〈斜めの視線〉という劇作法が作家の真に伝えたいことをカモフラージュしたということもあるが、それだけでは、なぜ数々の賞を授与され高く評価されたのか、なぜ観客に受け入れられロングランを記録したのかという問いの答にはならない。

ブエロは、国家あるいは国家権力を直接的には攻撃しない。彼は見えない権力、隠蔽されたイデオロギーを可視化し、それらを解体する。本論では、抑圧者／被抑圧者、現実主義者／逃避主義者、行動家／夢想家といった二項対立による従来の作品分析に異を唱え、一見すると二項対立に思える人間関係や権力関係が、解体され、逆転され、複雑に変化する様を考察する。そして、〈敗者〉のみならず〈勝者〉の苦悩を描写するブエロの作品には真の勝者が存在しないことを確認する。最終的には、国家を美化する〈正史〉に抵抗し、〈敗者の歴史〉を舞台にのせるためにブエロがとった劇作法の有効性を論証する。

### 第一章 盲目が可視化する権力 ——『燃ゆる暗闇にて』における神話の解体

ブエロ処女作の分析を、登場人物のほとんどをなぜ盲人にしたのかという問いから始める。盲学校が舞台になることで、見る／見られるという二項対立、つまりは眼差しの権力の不在を設定することが可能となる。盲学校において本来存在するはずのない眼差しは実は生徒自身によって創られ、

そこにはパノプティコンが成立する。ただ、生徒たちは眼差しの権力を隠蔽し、自分たちも晴眼者と同じ自由と幸福を享受できるという神話、すなわち「鉄のモラル」を信奉し、偽りの正常性に身をおく。転校生イグナシオは自由な空間とされる施設においても、常に権力関係という二項対立が存在することを訴えながら、施設の欺瞞を暴露し、神話を解体する。さらに、先天的な盲人が光を理解できないという設定は、眼差しの存在に疑問を投げかける。観客が見ていると思っている光景は現実なのか、権力が隠蔽され、幸福というイデオロギーによって神話化された偽りの姿ではないのか、とプエロは観客に問う。

## 第二章 敗者の叫びと歴史叙述 ——『サン・オビーディオの演奏会』の救済

本作品においても6人の盲人が登場する。プエロは盲目の物乞いとブルジョア階級の対立という一見単純な図式を用いながら、グロテスクなものとしての盲人と、不安やコンプレックスを抱えるブルジョアジーの複雑な関係を浮上させる。つまり、ブルジョアジーは、実体のつかめない不安やコンプレックスの原因をグロテスクな盲人に投影し、彼らを貶めることで心の安定を得る。プエロは、抑圧者／被抑圧者の関係が単純な二項対立ではないことを主張すると同時に、この権力関係を転覆させ、見えない者・語らない者が力を持つ世界を描きだす。

本作品では契約書や封印状など、書かれた文字の力が強調される。実業家バリンディンが音楽的才能のある盲人ダビドに対して抱く脅威は、文字を持たない弱者が文字を獲得することに対する恐怖である。プエロは、盲学校を創立した実在の人物バレンティン・アユイを舞台にのせ、盲人たちの文字の取得、それによって可能になる記憶の記録、ひいては彼ら自身の歴史叙述の可能性を提示する。

## 第三章 オーラル・ヒストリーのための戦略

### ——国家のイデオロギーを可視化する『バルミー博士の二つの物語』

プエロは、多層ナラティヴを巧妙に演劇化することにより、隠蔽された国家権力とそのイデオロギーを可視化し、国家のイデオロギー装置としての「政治装置」、「家族装置」、「学校装置」、「情報装置」を解体する。多層ナラティヴによるイデオロギー装置の解体は、隠蔽あるいは排除された個人の声を回復する。精神科医バルミーが患者の語りを本にするという設定は、本作品を〈敗者の歴史〉を叙述するオーラル・ヒストリーとして捉える可能性を示す。また、バルミーが診療の様子やその内容を秘書に口述筆記させながら、犠牲者を救えない自身の苦悩を語るとき、本作品はバルミー、そして作者プエロ自身のオーラル・ヒストリーとしての姿を呈する。

## 第四章 権力と抵抗の関係

### ——『バルミー博士の二つの物語』における内部からの抵抗

前章で扱った『バルミー博士の二つの物語』を、物語構造ではなく、登場人物の人間関係の綿密

な分析によって論じる。フーコーが論じるように、権力のあるところに抵抗が生まれることをブエロは舞台上で描く。彼は抵抗の手段が権力行使の手段と呼応することを強調し、抵抗手段としての暴力を肯定する。ただし、ブエロは、あくまでも国家の行使する暴力と、主人公メアリーの抵抗としての暴力が同質ではないことを主張し、メアリーの精神状態が正常ではないこと、夫ダニエルが殺されることを自ら望み、妻に感謝しながら死んでいくことを際立たせる。権力とそれが生み出す抵抗の関係は、国家権力とブエロ作品の関係になっていること、つまり彼の作品は国家が自ら生産した抵抗の形であることが提示される。

## 第五章 無名の人々の救済 —— 『明り取り』における記憶と歴史

本章では第三章で論じた歴史叙述についての議論をさらに展開させる。30世紀に生きる実験者二人は、本作品の上演年度と同じ1967年の社会をプロジェクターで上映するという実験を行う。実験者は、実際には1967年に生きる観客に実験への参加を呼びかけ、30世紀の人間に仕立てる。つまり、観客は見る主体であると同時に見られる客体というアンビバレントな立場におかれる。『サン・オビーディオの演奏会』で観客は18世紀に生きた盲人、つまり死者の声を聞いたわけだが、本作品では、設定においては死者であっても実際には今を生きる人々の声、つまり自分たちの声を聞くのである。ブエロは過去の記憶を回復し、無名の人々の歴史を救出すると同時に、現在の記憶をとどめておくことを観客に呼びかける。

重要な登場人物である認知症の父親が執着する絵葉書や雑誌の切り取り作業、および彼の長男殺しを分析し、父親が〈敗者の歴史〉と〈正史〉の二通りの歴史叙述を体現することを考察する。そして、プロジェクター映像、明り取りのなぞなぞ遊び、絵葉書や雑誌の切り取り作業が、枠を設定することによって「洞察」「想像」「創造」を可能にすることを論証しながら、記憶、フィクション、歴史の緊密な関係を明らかにする。

## 第六章 狂気からの覚醒と過去の責任 —— 『財団』、寓話の解体という寓話

本作品では冒頭から主人公の幻想世界が舞台上で展開され、観客もその幻想に取り込まれて舞台を見ることを余儀なくされる。主人公が正気を取り戻すのと並行して、観客は舞台上に現実を見ることになる。主人公の幻想は刑務所を財団に変え、優雅な生活を送りながら文化事業に従事する世界を作り上げる。死刑宣告を受けた政治犯の主人公が過去を忘却し、幻想世界に生きることは、国家権力を隠蔽することであり、権力行使の共犯者になることでもある。その主人公が同僚の協力により狂気から目覚めるとき、彼は過去に犯した罪の責任を引き受け、仲間と連帯することで効果的な抵抗を可能にする。

ブエロは本作品に「二部からなる寓話」という副題をつける。本章では、主人公の幻想という寓話と、その幻想からの覚醒という寓話、つまり二つの寓話が入れ子構造になっているという解釈に基づいて論を進める。幕が下りる直前に、主人公の幻想、つまり幕が上がったときと全く同じ舞台

装置が現われるのはなぜか。内枠の寓話を解体することで外枠の寓話が成立するという構造により、プエロは再現する財団の舞台装置を、覚醒の寓話の入り口として機能させ、観客に新たな覚醒、行動、連帯を予期させる。

## 結論 監獄から次の監獄へ ——『燃ゆる暗闇にて』から『財団』へ

本論で取り上げた5つの作品に共通するテーマ、権力、抵抗、暴力、記憶、歴史、そして〈勝者〉と〈敗者〉について、処女作『燃ゆる暗闇にて』からフランコ政権下で書かれた最後の作品『財団』までの流れを総括する。プエロはさまざまなジレンマを抱えながらも、独裁政権下で自ら表現したい作品、検閲を通して上演される作品、批評家に評価される作品、観客に受け入れられる作品を執筆したと言える。彼の作品は〈敗者〉の抵抗による権力関係の転覆を描くが、〈敗者〉が〈勝者〉になることは決してない。プエロは、〈敗者〉だけでなく〈勝者〉とされる者たちの苦悩やジレンマも前景化し、真の勝者など存在しないことを訴える。国家でさえ〈勝者〉となり得るのは、自らが創出する歴史のなかだけではないか。プエロの劇作法は、見せかけの〈勝者〉を創出する正史を解体し、〈敗者の歴史〉を構築するための有効な抵抗手段となっていると結論づける。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、20世紀スペイン、フランコ独裁政権のもと、厳しい検閲の目をかいくぐりながら、国家権力への抵抗のあかしとなる戯曲を数々発表した劇作家アントニオ・プエロ・バリエホの作品論である。著者はとくに5つの作品をとりあげ、それがどのようなかたちで抵抗となり得たかを論じている。

これまでのプエロ研究は、3人の主要な研究者、リカルド・ドメネク、ルイス・イグレシアス・フェイホー、マリアノ・デ・パコを中心に成り立ってきたが、三者ともプエロと親交が深かったこともあってか、プエロの立場に寄り添い過ぎていて、厳密な客観的研究とは言い難く、それ以後のプエロ研究もこの三者の論に立脚するものがほとんどである。著者はそのような先行研究の欠陥を補い、厳密なテキスト分析を行いつつ新しいプエロの作品解釈論を提示している。本論文と似たアプローチをとる研究として、本論文執筆中の2005年に公刊されたキャサリン・オレアリー『アントニオ・プエロ・バリエホの演劇—イデオロギー、政治、そして検閲』があるが、オレアリーが時代と作家の関係に重点を置くのに対して、本論文はテキスト分析が中心をなしている。本論文はまた、テキストを精細にたどるとともに、フーコーやベンヤミンなどを援用しつつ広い視野から作品を見ることも怠っていない。綿密なテキスト分析と広い視野からの考察が融合しているところに本論文の独自性があり、高く評価することができる。

本論文は序章、6つの章、結論で構成されている。序章では、スペイン演劇史におけるプエロの位置を概観した後、フランコ政権のもとで、権力に迎合することも現実から逃避することもなく、国内に踏みとどまって権力に抵抗する作品を著わしたプエロの劇作の特質、その戦略を的確に解明している。

第1章では、盲学校を舞台にしたプエロの処女作『燃ゆる暗闇にて』を対象にし、見る主体と見られる客体、支配する者と支配される者という二項対立が隠蔽されたり、あばかれたり、解体されたり、逆転したり、複雑に変化する状況を摘出し、見えない権力をプエロが観客に対して可視化する技法を論じている。一見単純そうに見えるテキストを深く読みこんでいる点、評価できる。

第2章は、やはり盲人を主人公とした『サン・オビーディオの演奏会』を対象とし、権力関係が転覆して見えない者が力を持ち得る可能性を考察している。契約書や封印状など、気づきにくい小物に着目して、書かれた文字の力の重要性や、被抑圧者が自分たちの歴史を語る問題を導き出し、説得力ある論を展開している。

第3章と第4章は『バルミー博士の二つの物語』を対象とし、第3章ではこの作品の複雑な劇構造を、第4章では登場人物の人間関係を中心に論じている。この作品の多層的な構造が隠蔽された国家権力とそのイデオロギーの可視化、また解体にどのように効果的であるかを、その構造を丹念に解きほぐしながら明確に論じている。精神科医バルミーの口述筆記が「敗者の歴史」を叙述するオーラル・ヒストリーにつながる可能性を示すという、広い視野からの考察は優れている。人間関係を分析した第4章では、権力とそれが内包する抵抗との関係を解き明かし、作者プエロをそこに映し出すことに成功している。

『明かり取り』を論じた第5章では、明かり取りのゲームや認知症の父親が行う切り抜き作業の意味を考察して、国家（権力者）のつくりあげた歴史から抹消された無名の人々（弱者）の記憶を回復し、記録するというこの作品の深い意図を浮き彫りにしている。国家が生み出した狂気が国家に対する抵抗となること、また狂気によるその抵抗の限界を精緻に分析している。

『財団』を取り上げた第6章では、狂気からの目覚めと連帯による抵抗が明快に論じられている。現実と思っていた世界が実は幻想でしかなかったことを、主人公とともに観客にも気づかせるというプエロの技法を見事に分析している。

最後に、5つの作品に共通するテーマ、権力、抵抗、暴力、記憶、歴史を総括し、プエロの劇作法が「敗者の歴史」を構築するための有効な手段となっていると結論づけている。

著者が病い（盲目、性的不能、認知症、狂気など）を上記の5つの作品に共通する重要なテーマであることに注目し、それを見えない状況を可視化する劇作家プエロの戦略であると指摘し、その主張を明確な論旨で検証しているのは高く評価される。構成も巧みで、隠蔽された権力の可視化から連帯による抵抗へ至るまでの過程がよどみなく論じられている。上述したように、テキスト分析に加えて批評理論を適切に援用し、論に広がりを与えている。また、権力を可視化し、敗者の声をひびかせるのに演劇という形式が有効であることを論じたのも説得力がある。やや概念定義に厳密さが欠けているとの指摘がなされたが、アプローチの独自性を含め、全体として質量ともに高い評価に値し、博士号を授与するのにふさわしい優れた論文であると全員一致して認めた。